

第1章 1992年度京都大学構内遺跡調査の概要

小野山節 清水芳裕 伊藤淳史

1 調査の経過

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事に際して、当該部局の報告にもとづき、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果より、発掘、試掘、立合にわけて実施している。1992年度には、以下の発掘調査3件、立合調査7件、資料整理1件を実施した。

発掘調査	医学部4号館校舎新営予定地（医学部構内AM17区）	（第3章、図版1-207）
	理学部動・植物学科校舎新営予定地（北部構内BA28区）	（第4章、図版1-208）
	工学部機械工学科等研究実験棟新営予定地（本部構内AV30区）	（整理中、図版1-214）
立合調査	理学部危険物倉庫新営工事（北部構内BB30区）	（図版1-209）
	理学部植物学教室温室新営工事（北部構内BE35区）	（図版1-210）
	病院地区基幹整備 サービスサプライ棟新営その他工事（病院構内AH14・15区）	（図版1-211）
	学内共同研究センター共同研究棟新営設備工事（病院構内AK10区）	（図版1-212）
	理学部瀬戸臨海実験所実験水槽室新営その他工事（和歌山県西牟婁郡白浜町）	（第1章、表11-213）
	病院地区基幹整備 外科系総合病棟改修その他工事（病院構内AH15区）	（図版1-215）
	農学部レントゲン室外部掘削（北部構内BF33区）	（図版1-216）
資料整理	分子生物科学実験研究棟新営予定地（病院構内AG14区）	（第2章、図版1-200）

2 調査の成果

前節であげた調査のうち、1992年度に整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお、和歌山県瀬戸遺跡の立合調査については本章第3節で、またAG14区、AM17区、BA28区の発掘調査については第2章、第3章、第4章で、それぞれ詳述している。

病院構内AG14区の調査では、東西の2つにわかれた調査区で異なる知見が得られた。東調査区では平安後期にさかのぼる集石や土坑がみつかり、院政期の白河北殿北辺の土地利用が、この地にも及んでいたことが明らかになった。一方、約60mを隔てた西調査区は、中世以前には高野川系流路の氾濫原となっており、都市近郊農村としての土地利用を示す道路や野壺など、近世後半の遺構のみがみつまっている。このように、平安後期にさ

かのぼる開発の及んだ範囲が把握されるとともに、近世聖護院村における土地利用の一端も明らかになり、鴨川周辺一帯の歴史的景観の変遷を知るうえで、貴重な資料が得られた。

医学部構内AM17区の調査では、中世前半期に属する建物跡、井戸、土器溜など生活にかかわる数多くの遺構のほか、多量の鉄滓や靱の羽口が出土した土坑など、鍛冶にかかわる遺構もみついている。また、土器溜からは土師器・瓦器・陶磁器類を含む良好な一括資料が多く得られたほか、井戸底には漆器や刀子鞘などの希少な有機質の遺物も遺存していた。こうした遺構や遺物は13世紀～14世紀を中心とする時期に位置づけられるもので、藤原北家観修寺流の邸宅周辺の人々の生活や土地利用の状況を示すと想定される。また、その上層からは、無数の溝状遺構をとまなう耕作土が複数層確認できた。これらは、谷状の地形にあわせて盛土を重ねて形成されており、南北朝期の争乱により荒廃したと予想されるこの地一帯で、15世紀以降には地業をとまなう耕作地の開発が進められた過程を知ることができた。以上の成果は、中世における社会の混乱に対応して変貌していったこの地一帯の景観と土地利用を、詳細に復元可能とする重要な資料となろう。

北部構内BA28区の調査では、先史時代から幕末に至る各時代の、多くの成果を得ている。先史時代では、弥生前期末～中期初頭における一時期の土石流堆積とみられる厚い黄色砂層の下から、縄文晩期～弥生前期の遺物包含層である黒褐色土層がほぼ全域にわたって検出された。この黒褐色土層の上面は弥生前期後半ごろの地表面を示すもので、緩やかな起伏をもった微地形と遺物出土状況との対応関係が把握されるなど、北白川追分町遺跡南端部の様子を知る貴重な情報が得られた。また、この層を突き破って下層より吹き上げる噴砂が数多く確認され、理学部地質学鉱物学教室により、詳細な分析を実施していただいている。一方、黄色砂層より上の面からは、平安中期の埋納遺構や土器溜、掘立柱建物跡などがみつき、同時期の一括資料を含む各種の土器類が多く出土した。埋納遺構は、墨書をもつ甕の内部に銭貨や金箔を納めたもので、地鎮にかかわるものと考えられる。文献記事により断片的に推測されてきた古代吉田社周辺の開発状況を知るうえで、一助となろう。表土直下の最上層では、絵図のみによっておよその所在が推測されていた幕末の土佐藩邸が、南縁を限る堀と同時期の井戸により、遺構としてはじめて確認できた。またこれらの遺構からは、投棄された大量の棧瓦が出土したが、そのなかには刻印銘をもつものが多くあり、20種類以上に及んでいる。同銘の刻印は京都近郊の瓦屋ではなく、高知城や周辺の武家屋敷で確認されていることから、地元産の瓦を調達していたと判断される。近世考古学のみならず、社会経済史的な側面からも、興味深い事実を提供する資料である。

3 和歌山県瀬戸遺跡の立合調査

瀬戸遺跡は、和歌山県西牟婁郡白浜町瀬戸所在の、京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内に位置する。これまで、石棒・土偶が採集されているほか、5次にわたる試掘・発掘調査と3度の立合調査が実施されており（図1-1～6地点）、縄文時代～奈良時代を中心とする複合遺跡であることが判明している〔中村友77、丹羽78、泉ほか80、泉・花谷84〕。今回の立合調査は、水族館第4実験水槽室新営その他工事にともない1992年12月5日に実施したもので、調査位置は図1-6d地点にあたる。なお、調査は浜崎一志・伊藤淳史が担当し、現地においては理学部技官榎山嘉郎氏の多大な援助をいただいた。

立合調査に際しては、既設建物撤去後に、工事に先だって東南隅部分を深く掘り下げ、層位的な堆積状況の確認を行った（図2）。この際、第5層の茶褐色中砂層および第6層の灰褐色中砂層中より微量の土器片が出土したことから、あらたに工事範囲の中央に南北方向の幅約2mのトレンチを設定し、慎重に掘り下げた。その結果、遺構の存在は全く確認されなかったが、第5層・第6層中より若干の遺物の出土をみた（図3・4）。また、立合調査実施後の工事による掘削で出土した遺物も榎山氏によって採集されており、ここにあわせて報告しておきたい（図5・6）。

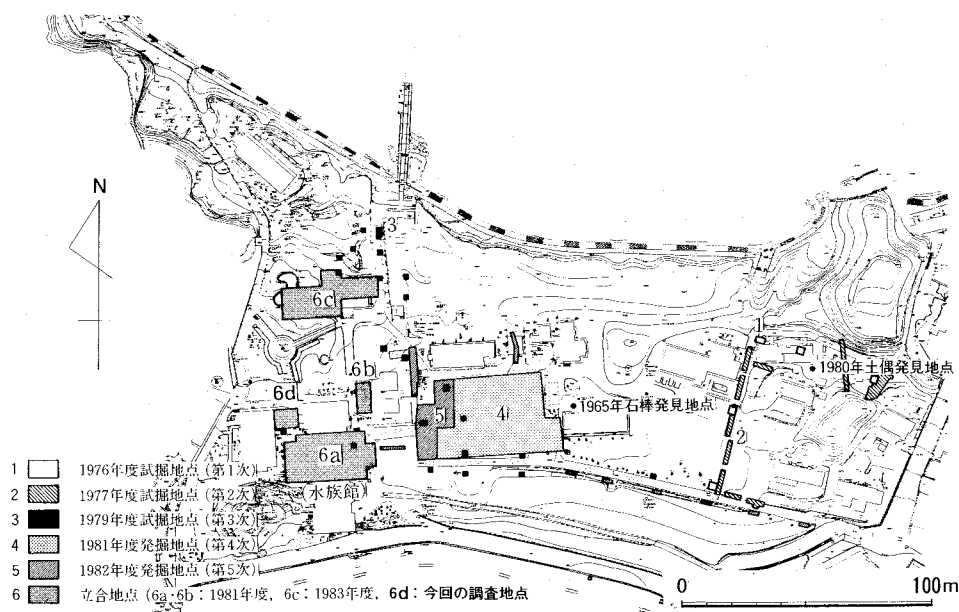


図1 瀬戸遺跡の調査地点 縮尺 1/3000

立合調査出土遺物 土器のうち、大半は無文の粗製土器である（図3）。I 1は茶褐色中砂層より出土した深鉢口縁部。端部を面取りし、器表面は内外とも横位方向に研磨する。I 2・I 4はともに浅鉢の口縁部で、茶褐色中砂層出土のI 2がやや厚手で端部を丸く収めているのに対して、灰褐色中砂層出土のI 4は薄手で端部を丁寧に面取りしており、内外面に巻貝条痕による調整を施す。I 3は1点のみ出土した有文土器片で、灰褐色中砂層より出土した。沈線内の刺突列と、3本然り縄文かとも思われる施文がみとめられ、一乗寺K式に比定できる。I 1・I 2・I 4もこれと同時期ごろのものとみてよからう。

石器には、刃部をもつ剥片・石錘・叩石などがあり、いずれも茶褐色中砂層より出土した（図4）。I 5はサヌカイトを利用した、刃部をもつ剥片。扁平な二等辺三角形の大形の剥片で、長辺に二次調整を加えて鋭利な刃部を作り出す。I 6は茶褐色の頁岩を利用した、刃部をもつ剥片。片側の面の一部には研磨したような擦過痕がみられ、穿孔を試みて中断したと思われるような径約4mmの円形の凹部があり、注意される。I 7は砂岩製の石錘。扁平な心葉形の素材を打ち欠いたものであり、重さ176.1gを測る。I 8は砂岩製の叩石。楕円形で片側の表面がわずかに凹んでおり、その面の中央に敲打痕がみとめられる。重さ425.5gを測る。以上のほかにもサヌカイトや石英製の剥片類や軽石が出土している。これらの石器類も、土器と同じく縄文後期後葉を中心とする時期のものであろう。

榎山嘉郎氏採集遺物 立合調査が終了した後の工事中に榎山嘉郎氏によって採集された遺物は、工事範囲の北辺付近を掘削中比較的まとまった状態で出土したもので、すべて土器片である（図5・6）。このうち、有文土器は小片のものがわずかにあるのみで、無文の粗製土器が大半を占めている。破片を接合すると器形をほぼ復元できる深鉢も含まれていることから、土器棺状の遺構が存在していた可能性もある。

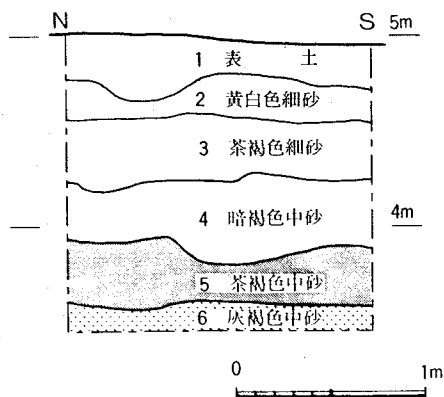


図2 調査区東壁南端の層位 縮尺 1/40

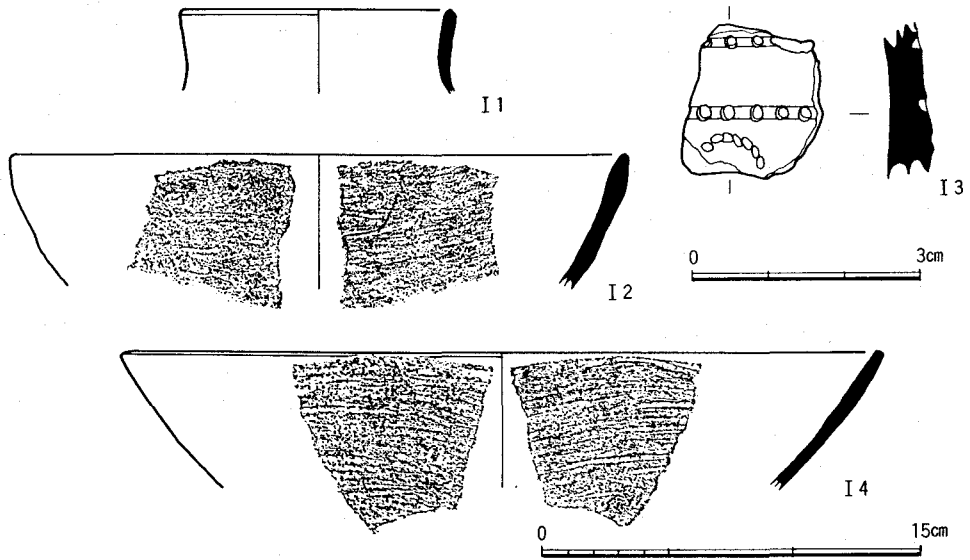


図3 立合調査出土遺物(1) I1・I2・I4縮尺1/3, I3縮尺1/1

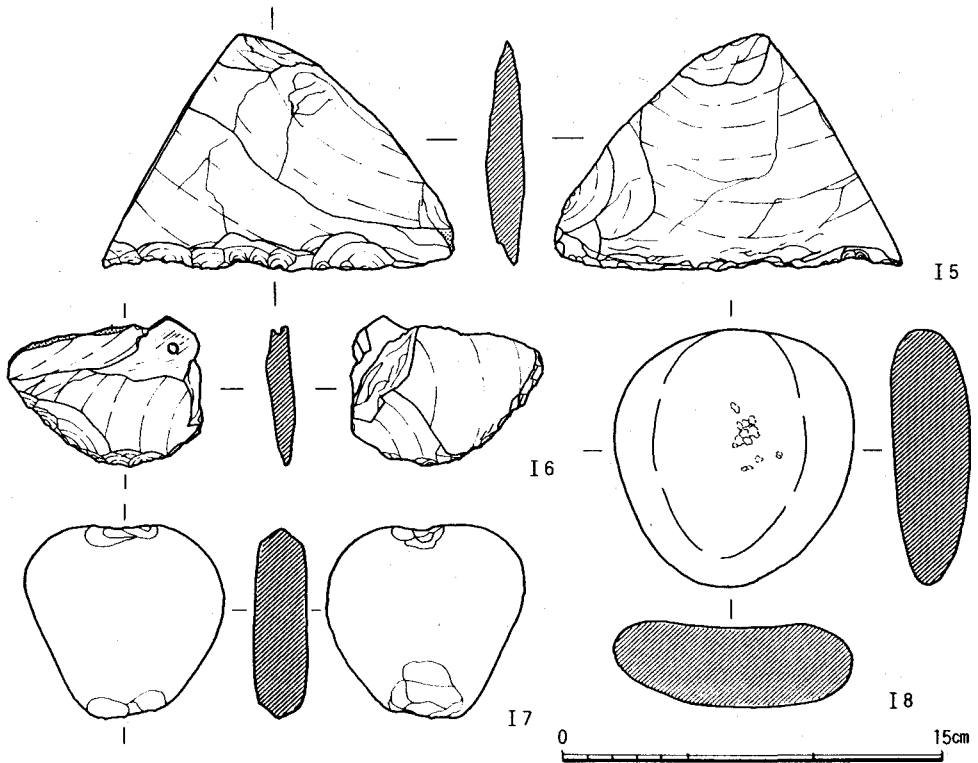


図4 立合調査出土遺物(2) 縮尺1/3

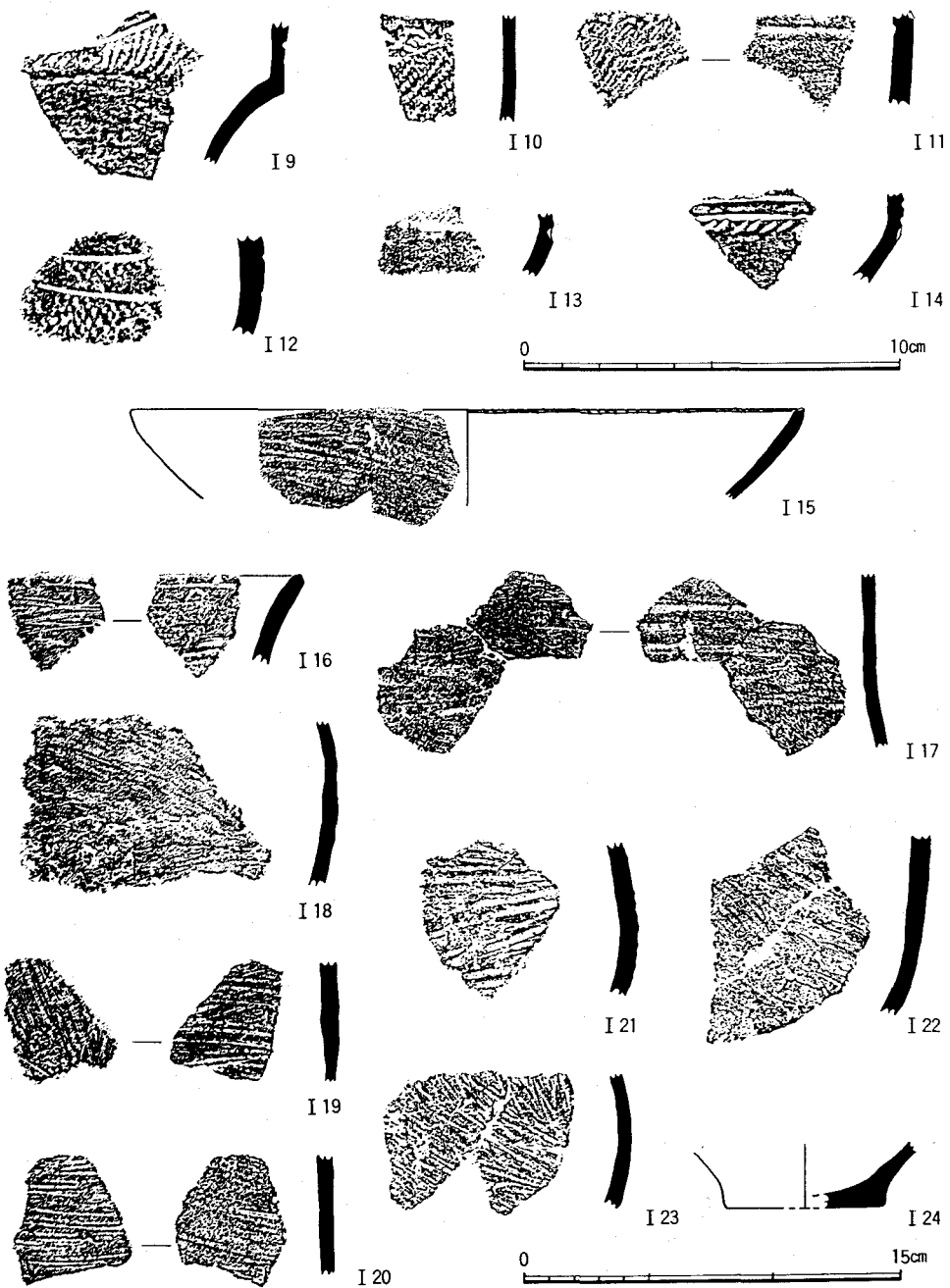


図5 樫山嘉郎氏採集遺物(1) I 9～I 14縮尺 1/2, I 15～I 24縮尺 1/3

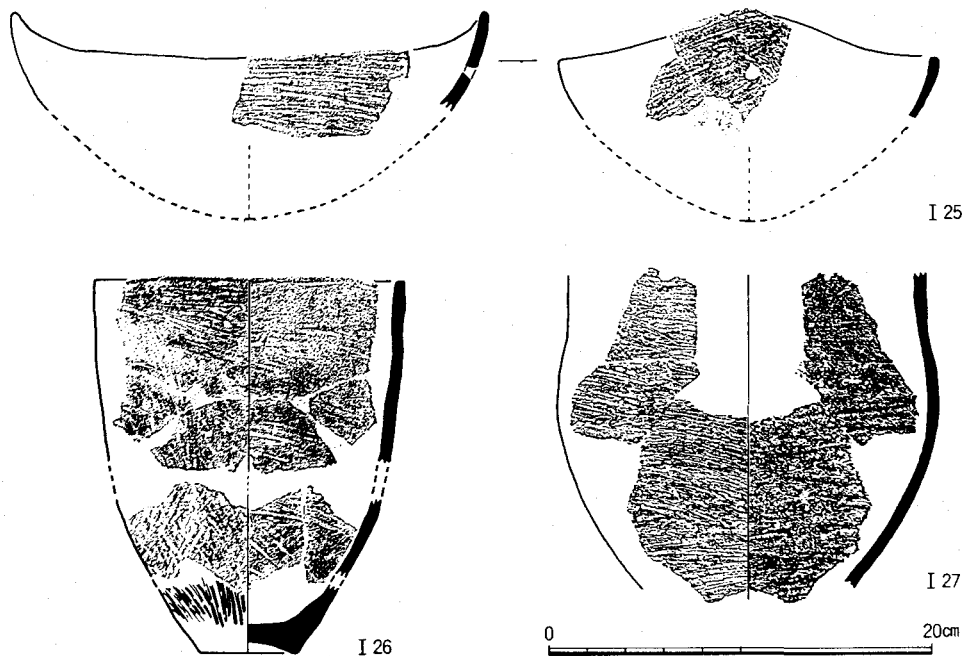


図6 榎山嘉郎氏採集遺物(2)

I 9 はく字形口縁を呈する有文の精製深鉢の一部と思われる、内面は巻貝条痕、外面は横位の篋磨きで調整している。I 11・I 13はI 3と同様に篋描沈線内に列状の刺突がみとめられる土器片。I 14は沈線と刺突列とを組み合わせた文様をもつ。これらはいずれも有文深鉢の胴部破片であろう。I 15は口唇部に細かな篋の刻みをもつ浅鉢で、外面を横位の巻貝条痕、内面を撫で調整する。このほかにも粗製土器片は多数あるが、それらは外面あるいは内外面とも巻貝条痕で調整するものを中心とする（I 16・I 17・I 19～I 21・I 26）。それ以外には、I 23は植物茎を束ねたと思われる原体による条痕調整が観察されるほか、I 18・I 22は粗い篋磨き状の調整を施しているが、原体については不明である。I 27は外面を植物茎による条痕、内面を巻貝条痕で調整している。I 25は舟形を呈する波状口縁浅鉢と思われる、残存する波頂部と側面の2破片からみて、長径25cm短径20cmの器形を推定復原できる。内・外面とも巻貝条痕で調整しており、それぞれに焼成後の補修孔がみとめられる。以上の土器は、一乗寺K式ないしは元住吉山I式に特徴的な器形・文様・調整を有しており、立合調査時の出土土器と時期を同じくするものである。

瀬戸遺跡においては、今回の調査地より東方約100m～200mに位置している第2次・第

4次・第5次調査地点で確認された、縄文晩期～弥生前期の壺棺墓や土器溜、古墳～奈良時代の製塩関連の遺構や遺物などをこれまでの主要な調査成果として挙げる事ができ、遺跡の中心となる範囲と時期もおおむねそのあたりに求められてきた。今回の出土遺物は、これらとは時期を違える縄文後期後葉ごろにまとまるものであり、遺跡の範囲と存続期間について再検討を必要とする貴重な知見を提供することとなった。なお、近接して実施されている1981年度の立合調査（図1-6a・6b 地点）においても、元住吉山Ⅰ式から宮滝式の時期に比定される土器が採集されていることから〔京大埋文研83 p. 4〕、これに今回の調査成果もあわせて考えるならば、これまで調査されてきた東方の地点とは別に、水族館を中心とする西方の一帯にも、縄文後期後葉を中心とする時期の遺跡が存在している可能性が高いといえる。今後の調査にあたって注意していく必要があるだろう。

末尾ながら、立合調査にご協力いただいたのち、工事中の遺物出土にも注意を払われ、採集遺物を快く提供していただいた檜山嘉郎氏に、厚く御礼申し上げたい。